

氏名(生年月日)	小 池 美 菜 子
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2289号
学位授与の日付	平成16年10月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	<b>Effect of low dose-steroid therapy in patients with IgA nephropathy (IgA腎症に対する低用量ステロイド剤の有効性)</b>
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第74巻 第6・7号 305-313頁 2004年
論文審査委員	(主査) 教授 二瓶 宏 (副査) 教授 吉岡 俊正, 扇内 秀樹

## 論文内容の要旨

### 〔目的〕

IgA腎症に対するステロイド治療は一般的に、クレアチニン・クリアランス (Ccr) が70ml/min以上で、蛋白尿が1.0g/day以上の症例を対象に行われることが多い。しかし、活動性が異なるIgA腎症に対するステロイド治療は確立していない。

今回我々は、疾患活動性が低いIgA腎症に対する低用量ステロイド療法(20~30mg/day)の有効性を検討した。

### 〔対象および方法〕

対象は、糸球体および間質における炎症性変化が軽度である20例のIgA腎症(男性5例, 女性15例)で、平均年齢は39.2±9.4歳である。腎生検時の血清クレアチニン (Cr) 値は0.9±0.3mg/dlであり、蛋白尿は1.0±0.8g/dayであった。

低用量のステロイド(20~30mg/day)治療を開始し、漸減しながら12ヵ月間にわたって、血圧、蛋白尿、血尿および血清Cr値の推移を観察した。また、ステロイド治療後に血清Cr値が低下または不変のグループIと血清Cr値が上昇したグループIIに分けて病理組織所見の違いを比較検討した。

### 〔結果〕

全例の検討では、ステロイド治療前後の血清Cr値に有意な変化は認められなかった。ステロイド治療前後で、蛋白尿(1.0±0.8 vs. 0.5±1.1g/day, p=0.02)および血尿(30.0±32.7 vs. 6.1±6.7 RBC/HPF, p=0.003)は有意に減少した。ステロイド治療中の収縮期および拡張期血圧に有意な変化はなかった。腎生検所見を比較すると、グループIIに比しグループIで動脈硬化の程度が軽度であった(0.4±0.5 vs. 0.8±0.4, p=0.001)。

### 〔考察〕

IgA腎症に対するステロイド治療は、腎機能が良好で蛋白尿が1g/day以上の症例を対象に施行されてきたが、投与量には一定の見解が示されていなかった。最近では、腎機能低下例にも高用量(40~60mg/day)のステロイド治療が有効であるという報告も散見されるが、副作用に対する配慮はなされていないのが現状である。今回の検討より、疾患活動性が低いIgA腎症に対する、低用量ステロイド療法(20~30mg/day)の有効性が確認された。

### 〔結語〕

糸球体と間質の炎症性変化および血管病変が軽度のIgA腎症に対しては、低用量ステロイド療法が有効であると考えられた。

## 論文審査の要旨

IgA 腎症に対するステロイド治療は、クレアチニン・クリアランス (Ccr) が 70ml/min 以上で、蛋白尿が 1.0 g/day を対象とするのが一般的であるが、活動性が異なる症例への評価は確立されていない。今回、疾患活動性が低い IgA 腎症に対する低用量ステロイド治療の有効性を検討した。

腎生検で糸球体と間質の炎症性変化が少ない 20 例を対象に 20~30mg/day のステロイドを 12 ヶ月間投与し、血圧、血尿、蛋白尿、血清クレアチニン (Cr) を観察した。治療開始後に Cr が低下または不変の I 群と上昇した II 群について病理組織所見の差を検討した。蛋白尿は 1.0 から 0.5g/day に減少し ( $p=0.02$ )、血尿も 30.0 から 6.1 RBC/HPF に減少したが ( $p=0.003$ )、血圧には変動が見られなかった。腎組織所見では I 群で II 群に比し動脈硬化の程度が軽度であった。

IgA 腎症に対するステロイド治療の有用性が認められつつあるが、その適応範囲を広げる意味で臨床的に価値ある論文である。